



故 片平信貴氏

天命を知る人——片平信貴さん

武 部 健 一*

片平信貴さんに最初に会ったのは昭和28年3月のことである。片平さんは、その頃建設省道路局道路企画課課長補佐で、東京・神戸間的高速道路の調査の責任者として、京都の下鴨にあった建設省寮の対寮房で関東、中部、近畿の三地建の打ち合わせ会を主催された時のことであった。大塚勝美さんが片平さんの下の係長として一緒に来られていた。私はその時、関東地建計画検査課の道路係の一員として参加する機会を得たのであった。私事ながら、前年に結婚したとき、貧しかったために新婚旅行に行けなかった。折り良い出張の機会であったので、妻と一緒に連れて行き、友人の家に預けて、近くを案内してもらったりして新婚旅行の代わりにした、そんな時代であった。

それ以前に東京から厚木間での路線測量などは直営で一応手掛けてはきたが、ドイツの本から取られたらしいインターチェンジの図面に初めて接して、驚きと感動に震えた。その時が私の高速道路との関わり合いの始めだった。私の人生の大部分を占める高速道路との関わり合いは、こうして片平さんとともに始まり、片平さんの最後までほとんどそのことでお付き合いをしてきたといってよい。

昭和31年4月に日本道路公団が設立されて、片平さんは本省から公団入りされた。私もほぼ時を同じくして藤森謙一さんから従って道路公団に移り、数年経ってから片平さんの直接の部下として働くようになった。片平さん自身は暫くは計画部技術課長の職にあったが、名神高速道路建設について正式に公団に施行命令が出された32年10月に組織改定となって名神高速道路部第一課長（部長は菊池明理事兼務）、翌33年4月からは同部長となった。片平さんは名神高速道路の建設において文字どおり中心人物であった。司令官というより参謀長というほうが似合っていたであろう。公団名物ディスカッションといって、大学出たての若い技術者を集めて、侃々諤々飽きることを知らない風であった。

片平さんの名神高速道路に対する仕事のかなり多くの部分に、世界銀行のアドバイスによって外国から招いた技術者との対応があったようだ。ドイツから招いた線形や道路景観設計のドルシュ氏、アメリカから招いた舗装のソンドレガー氏、試験所担当のラブ氏の3人である。彼らと実に率直に付き合っていたから、その後も親交がつづき、ソンドレガー氏などはつい最近まで、フィリピンで仕事を一緒にしていたものである。ドルシュ氏とは高速道路設計の思想の上でウマが合ったというか、線形設計や景観設計がその後の片平さ

* ㈱片平エンジニアリング取締役社長

んの理想実現の道具となったといっただろう。

名神高速道路以後、引き続いて担当した東名高速道路こそ、片平さんの生涯を掛けた最大の遺産となったのではないかと。名神高速道路で蓄積した道路公団の技術力を遺憾なく発揮できる舞台であったし、資金的にも余裕があったから思いどおりの仕事ができただけではなかったろうか。昭和39年に理事に昇進されて暫くして、静岡建設局長に併任されて現地に駐在されたときに、ちょうど私もそこに勤務していたが、トンネポータル側面の擁壁に伊豆産の石材を使うことを熱心に推進したり、仕事を大いに楽しんでいる風であった。

しかしよいことだけは続かない。片平さんの静岡時代の苦い思い出の中に「ポタシュニック事件」がある。今でも日米経済摩擦論議で時々思い出される事件でもあるが、国際入札になっていた東名高速道路の土工工事の一つをポタシュニック社が落札して工事を始めた。それが片平さんが局長を務めていた静岡の管内にあった。ポ社の執行体制が不十分で、よい下請けも確保できず、工事は予定どおり進捗しなかった。世銀当局も注目する中で、結局工事完成の見込みが立たず、隣接工区業者の佐藤工業に権利・義務を譲渡することとなり、幸い工事は工期限内に完成をみた。この間のポ社との交渉、佐藤工業への譲渡話し合い、世銀への了解折衝など、そのすべてに片平さんは奔走された。その間の片平さんの心労は極めて深いものがあった。

昭和43年5月、静岡での仕事を終え、本社の理事の職務に戻られた時には、高速道路は既にいわゆる新規五道として全国に展開を始めていた。しかし、名神や東名高速道路と違って、一挙に全国に展開したこともあり、予算的に厳しく、路線選定でもかなり制約された線形を選ばねばならなかった。そうした事は片平さんの意には染まなかったことのように



会長を務めた(昭和58~61年) REAAA の昭和58年8月の第4回大会にて。右は開催地インドネシアのスハルト大統領。

思える。45年に公団を退任されると自らコンサルタント会社を設立されたのは、あるいはそんなことが関係しているのかもしれない。

それから十年ほど経って、私自身が片平さんの会社にお世話になるようになった。その頃には、片平さんの気持ちは国内より海外のほうにより多く向いていた。国内でのコンサルタントの仕事は、片平さんが最初に思い描いたようには進まなかった。片平さんは、外国のコンサルタントのように、知的なアドバイスによって計画や設計の基本が決めるような仕事を望んでおられたようだったが、日本の現実はいずれからは遠かった。会社の経営としては、図面の枚数で教えられるような労働の積み重ねがなければ成り立って行かない。どんなにそのアドバイスによって建設費が節減されたとしても、レポートの厚みによってしか支払われないのである。

海外の仕事では、幸い日本のコンサルタントも全面的責任を持つような仕事を委任される。特にフィリピンでは、率直明朗な国民性もあって、片平さんは、技術力だけでなく人間的な魅力も加えて、政府部に厚い信頼を築き上げていた。2年程前に奥さんを亡くされてからは、マニラに滞在される期間が長く

なった。平成元年7月3日朝、片平さんがマニラで客死されたとき、その知らせはたちまちのうちに公共事業道路省部内を駆け巡った。その日、公共事業道路省を訪れた日本人は、皆「ミスター片平が亡くなったのを聞いたか」と問われたものであった。教会で執り行われた通夜の席には、政府高官から女性秘書に至る多くの人が詰め掛けた。それを目の当たりにすれば、片平さんがいかにこの国を愛していたか、また片平さん自身が愛されていたか、そして恐らくはこの国で最期を迎えることに心安らかで満ち足りておられたかが分かるというものであった。

フィリピンだけではない。マレーシアに本拠を置く REAAA（アジアオーストラレーシア道路技術協会）を通じて諸外国の道路技術者と親交を深め、一時期会長も務められた。その協会に、遺言によって幾許かの金額が贈与されている。



片平さんにはシャイなところがあった。同時にやや屈折した気持ちも持ち合わせていた。あれだけの学識と著書などを持ち、周囲に勧められても学位を取得されなかったところにそれが現れているような気がする。俳句の作風には、そうした屈折から解き放たれた光の輝きが見えるようだ。

5年前に心臓の手術をされ、その後元氣を取り戻されたが、自分では予期するところがあったのか、静岡の建設局時代の仲間で作っている会の毎年5月に静岡で集まる会合に出席されると、「今年は来られましたが来年はどうですか」と、ここ何年か述べられていた。ご息元にパスポートを準備するよう命じられ、自分が外国で不慮のことがあったときに慌てないような処置を取られていた。墓も浅草の東京本願寺に、奥さんが亡くなられたとき建てられて、自分の戒名に朱を入れて

おられた。

片平さんは後ろを振り向かない人であった。思い出話をする片平さんを見たことがない。片平さんは、その人生の中で幾つかの挫折を味わっておられるはずだ。少なくとも自分の考えが世間や周囲とうまく適合しないもどかしさを折りに触れて感じておられたに違いない。しかしだからといって、自分の考え方をあえて曲げるようなことはされなかった。

井上靖の小説『孔子』の中に、「天命」の話が出てくる。

——われわれ人間が為すことは、それがいかに正しいことであれ、立派なことであれ、事の成否ということになると、すべてを天の裁きに任せなければならない。一つの仕事の遂行に当って、天からいかなる激励と援助を受けるかもしれないし、いかなる支障と妨害によって、行手を阻止されるかも判らない。こうしたことは大きな天の計らいであって、小さな人間の理解し得るところではない。

併し、そうした中にあればこそ、人間は常に正しく生きることを意図しなければならぬ。天が応援してくれるか、妨害するか、そうしたことは一切判らないが、兎も角、人間はこの地上に於いて、正しく生きることを意図し、それに向かって努力しなければならないのである。そうした人間を、必ずや天は嘉^よしてくれるに違いない。“嘉す”とは、天が“よし”として下さることである。

天が嘉して下さるというのであれば、人間としては、それでいいではないか。——

片平さんは、「天命」を知っていたのではないか。見事な生涯を貫いたというべきであろう。一周忌までには、句集が同人の手によって、編纂、上梓されるとのことである。